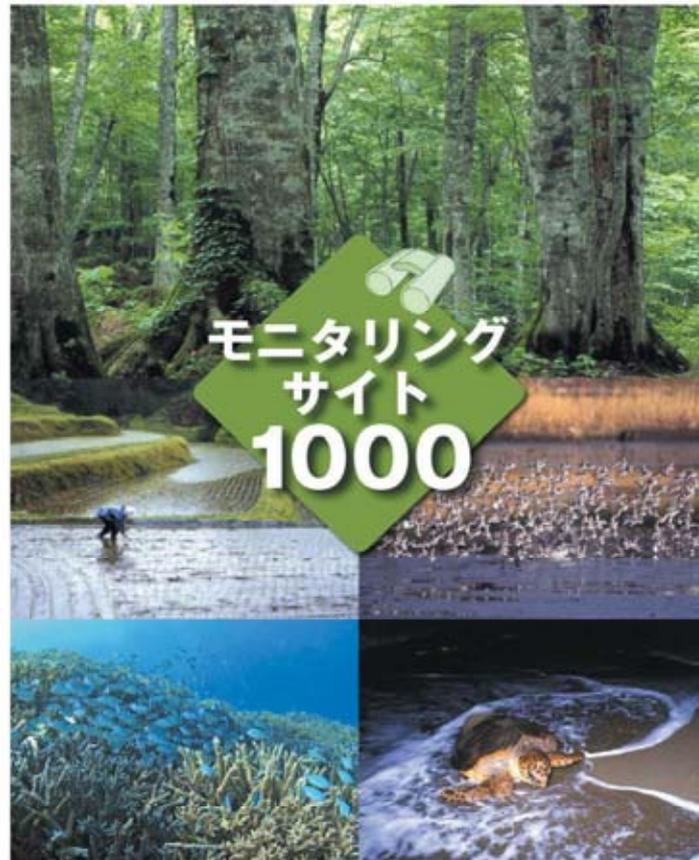


ニューズレター



100年の自然の移り変わりをみつめよう



「モニタリングサイト1000」パンフレット

「モニタリングサイト1000」を開催しました！

平成14年3月、わが国の生物多様性保全の基本的な考え方や計画を示した「新・生物多様性国家戦略」が策定されました。このなかで、今後5年間の計画期間に着手・推進すべき7つの提案（絶滅の防止、自然の再生、移入種対策など）が示されています。その1つとして、より質の高い自然環境データを継続的に収集・蓄積する「モニタリングサイト1000」があります。

長期にわたる継続的なモニタリングで得られたデータを分析することにより、生物種の減少など、自然環境の移り変わりをいち早く捉え、迅速かつ適切な保全対策につなげることができます。

生物多様性センターでは、平成15（2003）年から、この「モニタリングサイト1000」に着手し、枠組みの検討や調査サイトの設定等を進めてきました。次頁に、その概要をご紹介します。



CONTENTS

- モニタリングサイト1000の紹介 P2
- モニタリングサイト1000 P3
 - “生態系長期モニタリングの意義と動向”
- 「昆虫WEEK」開催について P4
- 生物多様性カード第2弾について P5
 - トキ剥製貸出について
 - 植生図入札
- 標本紹介（第11回） P6
- 生物多様性センターガイド P7
 - 収蔵庫の解説（第2回）
- 「生物多様性まつり 2006」について P8
 - センターの出来事
 - センター案内図

モニタリングサイト1000

モニタリングサイト位置図

生態系での主な調査項目

- 森林草原…………… 樹木生長調査、森林生産量調査、
地表性甲虫類調査、繁殖鳥類調査
- 里地里山…………… 生物相調査、指標種調査
- 河川・湖沼・湿原… ガン・カモ調査
- 砂浜…………… ウミガメ調査
- サンゴ礁…………… サンゴ被度調査
- 島嶼…………… 海鳥調査

- 凡例
- 森林・草原
 - 里地里山
 - 河川・湖沼・湿原
 - 干潟
 - 砂浜
 - サンゴ礁
 - 島嶼



生物多様性センターでは、平成19年度までに調査サイトの設定や各種の調査を実施し、これらの成果を踏まえて、平成20年度から本格的なモニタリングを開始します。これらの取組みについて紹介パンフレットを作成しました。これは生物多様性センターホームページでもご覧いただけます。また、今後の進捗状況についても逐次お知らせする予定です。



リタートラップ

樹木から落下する葉や実などを捕捉する調査用具。定期的にトラップにかかったものを回収し、量や種類を分解する。

1) 概要

- ・ 全国1000箇所程度を目安として調査サイトを設置し、生物多様性に関わる研究者や地域の専門家、NPO等とネットワークを構築し、その協力による継続的な長期にわたるデータ収集を行います。
- ・ これらの情報は生物多様性センターにおいて蓄積・管理し、逐次公開するとともに5年ごとに総合解析を行います。
- ・ 関係者との間に情報の収集提供システムを構築することにより、収集する情報の精度を保つとともに、迅速な情報の収集及び利用を進めます。

2) 調査サイト

- ・ 我が国の主な生態系タイプ毎の動向を把握するため、森林、里地里山、湖沼、湿地、海岸、浅海域（干潟、藻場、サンゴ礁）などの生態系ごとに、全国的な地域区分を考慮しながら、順次サイトを配置します。
- ・ これまでに全国で約600カ所のサイトを設定し、各生態系ごとに定めた調査項目について試行調査を開始しました。特に、鳥類については各生態系を横断する指標種として調査を行っています。



毎木調査

ある一定の区域に生えている樹木について、その種類や大きさを調べます。

3) 調査結果

モニタリングサイト1000で得られた調査結果は、ホームページ等を通じて広く公開します。これにより、国はもちろん、自治体、NPO団体、研究者、学校など、幅広く活用されることを期待しています。

生態系長期モニタリングの意義と動向

生態系長期モニタリングの意義と動向

東北大学生命科学研究科 中静 透

生態系モニタリングの特性と問題点

モニタリングは、その時点での状態を知り将来の状態を予測したり必要な対策をとったりするために行われる。しかし、生態系を対象とした場合にとくに考慮しなくてはならない点がいくつかある。生態系では多くの生物の複雑な相互作用の結果が多様な機能として発揮される。だが、個々の生物と生態系全体の機能との結びつきが明瞭になっていない場合が多く、変化やその結果に対する予測性が低い。さらに、変化のスピードが遅かったり、数十～数百年に一度というような稀な出来事が大きく影響したりする場合がある。生物多様性問題では、限られた地域で重要な変化が起こる場合が多い。人間活動由来の変化は自然の変化とは時間的空間的スケールがまったく異なる可能性がある。

したがって、正確な予測や有効な対策のためには、第一にモニタリングすべき種やパラメータの選定が重要である。しかし、生態系が機能する仕組みや、の中で個々の生物が果たしている役割が十分解明されていないため、その選定は簡単ではない。重要な種群全体の変化を把握しようとすると、種の同定に専門性が必要であったり、観測手法が分類群によって異なったりするため、機械化や自動化、あるいは精度の確保が難しい。また、限られた地域やその生物の特殊性を考慮すると、共通の手法が適用できない場合もある。タイムリーな対策をうつためにはリアルタイムのモニタリングが重要であるが、分類や同定、分析などに時間がかかる。一方、ゆっくりした変化や年変動の大きな変化に対しては、長期にモニタリングを継続することが必須となる。

モニタリングに関する最近の動向

人間活動が地球規模で生態系の変化を引き起こしているという認識から、国際的なモニタリングの動きは増えている。国連を中心として、陸上ではGTOS (Global Terrestrial Observing System)、海洋ではGOOS (Global Oceanic Observing System) が1996年から動いている。ここでは、土地利用や資源の現状について、衛星などを用いて広域的に把握することが大きな目的となっている。また、2001-2005年に実行されたMA (Millennium Ecosystem Assessment) では、既存の資料や衛星データを用いて、最近の生態系の変化とともに、その変化がもたらす人間への影響(生態系サービスの変化)を総括し、今後の対策についての基本方向を明らかにした。

さらに、GEOSS (Global Earth Observation System of Systems) では、災害、健康、エネルギー、気候、水、気象、生態系、農業・砂漠化、生物多様性の9分野での国際的観測網の整備がうたわれ、既存の観測システムを統合した上位システム(system of systems)の構築をめざすことになった。環境省で始められたモニタリングサイト1000も、生態系や生物

多様性に関する観測の国際的イニシャティブを発揮できるし、ぜひそうしてほしいと思っている。日本の総合科学技術会議の重点観測項目には生態系や生物多様性は選定されなかったが、今後さらに重要性を増すことは疑いない。そのためには、冒頭に述べたような生態系観測の難しさを克服した手法やシステムの開発を急ぐ必要がある。



研究とモニタリング

以上のようなモニタリングの事業や国際枠組みとは別に、研究レベルでも生態系の長期あるいは広域的な変化とそのメカニズムを把握しようとする動きは1970年代後半から始まっている。アメリカで始まったITER (Long-Term Ecological Studies) は、IITER (International ITER) というネットワークに広がっている。このプロジェクトでは、ある地域の生態系や景観を長期的・学際的に研究することで、生態系変化のメカニズムやその管理方法を理解することが目的であり、モニタリングすべき対象の選定や必要な時間的空間的解像度の決定に重要な成果をもたらす。さらに、最近アメリカではNEON (National Ecological Observatory Network) という計画が数百億円という予算で開始されようとしている。この計画は、ITERとは異なり、生態系観測に関するスタンダードの確立と技術革新を目指している。これまで、専門家によって行われてきた作業を機械化・自動化し、大量データをリアルタイムで分析するシステムの開発などが具体的に構想されている。

有効な生態系モニタリングには、ITER型およびNEON型の両方の研究成果が必要であると考えられる。GEOSSでも、スーパーサイトのような形で各分野をまたがるような総合的観測を行うサイトと、それをスケールアップするために必要な個々の観測を行うサイトというような階層化が議論されている。モニタリング1000においても、実際のモニタリングに各種の研究成果を反映させて、有効なシステムを常に発展させてゆく必要があるだろう。



ゴールデンウィーク特別イベント「昆虫WEEK」を開催しました！

生物多様性センターでは4月29日から5月7日にかけて、ゴールデンウィーク特別イベント「昆虫WEEK」を開催しました。このイベントは、生物多様性センターの開設以来初の試みとなる連続9日間にわたる長期イベントで、昆虫を通じて生物多様性について学んでもらうことを目的に企画したものです。

今回のイベントの目玉となったのは、生物多様性センターに収蔵している日本産クワガタの標本画像を掲載した生物多様性カード第一弾（クワガタカード15種類）のお披露目でした。このカードは施設内に設置しているバーコードリーダーでカード裏面のバーコードを読み取ると、パソコンの画面上に標本の拡大画像や分布図等が表示され、詳しい情報を見ることができる仕掛けになっています。

このカードは、イベント内の様々な参加型コーナーに挑戦することで手に入れることができ、詳細情報を閲覧することはもちろん、カードそのものは持ち帰ることもできるため大変好評でした。特にクワガタの生息する森林環境を模造したカード探しコーナーは子供たちに大人気で、カード収集に熱中する来場者が続出しました。

標本展示コーナーでは生息環境ごとに特徴を持った様々な種類の昆虫標本を展示し、普段お目にかかれない珍しい標本が多くの来場者の興味を引いていました。中でも日本産クワガタ全種類の標本を一挙に展示したコーナーは、子



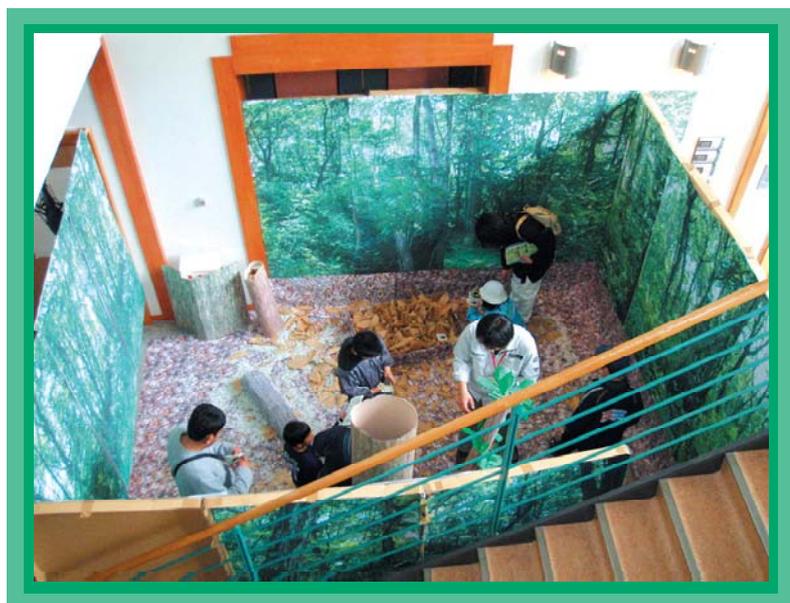
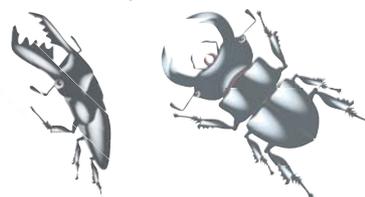
昆虫標本は子供も大人も興味津々

供よりもむしろ大人の来場者の方が足を止めていたようです。また、外来生物、希少種の昆虫等についても展示し、自然環境保全の大切さについて知ってもらうきっかけとなりました。

その他、ガイドスタッフの案内のもと野外の土壌生物を観察する「昆虫博士講座」や、館内各所に配置された昆虫に関する3択式クイズを巡る「クイズラリー」、動物の親子関係を考える「親子当てパズル」等を実施しました。

イベント期間中は連日多数の来場者で賑わい、来場者の総計は延べ3000名を超える盛況ぶりでした。また、多くの方が長時間滞在されていた様子で、「参加して楽しかった」というご意見を多数いただきました。イベントに参加されました来場者の皆様にはこの場をかりて感謝申し上げます。この成果をふまえて、今後とも展示・イベント内容を充実させるようスタッフ一同心掛けていく次第です。

なお、生物多様性カード第1弾クワガタカードについては、1枚ずつではありますがイベント終了後も来館者の方にお配りしていますので、興味のある方は是非ご来館ください。また、夏休みには生物多様性カード第2弾「里地里山の昆虫」の配布を開始する予定ですのでお楽しみに！



大人気だったカード探しコーナー

生物多様性カード第2弾 「里地里山の昆虫」 7/20 配布開始!

GWに開催した「昆虫WEEK」で好評だった生物多様性カード昆虫シリーズの第2弾の配布を夏休みから始めます。

前回の「日本のクワガタムシ」に続き、今回は「里地里山の昆虫」です。

人と自然が調和した環境である「里地里山」は日本の国土の約4割を占め、雑木林・田んぼ・小川・草地など様々な環境がパッチ状に入り組んだ「生物多様性」の宝庫です。今回カード化した昆虫たちは、人が作り出した環境にうまく適応した身近ないきものたちで、実際に野外で観察したことがある方も多いはずです。

ところが身近な自然であった里地里山の多くは住宅地やゴルフ場に姿を変え、また残った所も過疎化や高齢化に伴う管理不足により、かつての姿が失われつつあります。絶滅のおそれがある生物の分布域のなんと約半分はこの里地里山であるといわれています。



「生物多様性カード第2弾」

今回はそんな身近であると同時に危機的な状況にある里地里山にすむ昆虫から、12種類をピックアップしてカードにしました。前回と同様に表面は標本写真、裏面には実物の大きさ、豆知識などの情報を載せています。もちろん今回も生物多様性センターに設置した情報端末で、昆虫の拡大画像や詳細情報を見ることができます。

夏休みは生物多様性センターで生物多様性カードを手に入れよう。

そしてカードをもって、実際に野外で身近ないきもの環境に目を向けてみよう。

「第60回全国野鳥保護のつどい」 に剥製の貸出を行いました

「愛鳥週間（バードウィーク）」（5月10日～16日）の中心行事として、5月14日に東京の日比谷公会堂で開催された「第60回全国愛鳥のつどい」に、生物多様性センターからトキ・シマフクロウ・アホウドリの3体の剥製を貸し出しました。

当日は約1000名の来場者があり、多くの方に興味深く観覧していただきました。



トキ

第7回自然環境保全基礎調査植生調査 平成18年度植生図作製業務 入札の実施

植生図は地域の自然状況を把握するための手段として優れた方法の一つであるため、自然環境の保全にとって重要な基礎図として位置づけられています。

環境省では自然環境保全基礎調査の一環として植生調査を実施し、植生図を作製しており、生物多様性センターが調査の企画、取りまとめを行っています。6月8日及び7月4日に、平成18年度自然環境保全基礎調査植生調査植生図作製業務の、入札を実施しました。

本年度は昨年度の5ブロックから7ブロックへと植生図の整備地域が一つ増え、北海道、東北、中部、北陸、近畿中国・四国、九州・沖縄の各ブロックについて、植生図を作製することになっています。

人の動き

(転入)

阪口法明 【野生生物課より】 (7月1日付)
中村仁美 【新規採用】 (7月1日付)

(転出)

小林幸恵 【退職】 (5月)

生物多様性センターに収蔵している標本の紹介 (第11回)

生物多様性センターに収蔵している標本の紹介

和名 : アカモク

学名 : *Sargassum horneri* (Turner) C. Agardh



(第11回 海藻・海草)

“山梨の山の中に、なぜ海の植物～海藻や海草～が?”

昆虫や鳥類、哺乳類、陸上植物の標本に混じって、多様性センターには、海藻や海草の標本が収蔵されています。“なぜ、海なし県の山梨にある多様性センターに海のものか?”と不思議に思われるでしょう。これらの標本は、第6回自然環境保全基礎調査浅海域生態系調査(全国藻場調査)の調査標本として納入されたものです。この調査は、本邦沿岸の藻場の多様性を調べることを目的として、平成14年よ

5カ年をかけて行われているものです。

“藻場”とは、聞き慣れない言葉ではないでしょうか。簡単に言えば、海藻や海草等の底生植物群落により形成される浅海域の重要な生態系のことです。こうした群落は沿岸における一次生産を支えるだけでなく多様な海の生き物に餌や生活の場を提供しています。私たち人間とて、おいしい魚介類を食べることができるのも藻場の存在のおかげです。“藻場”とは、沿岸の底生植物群落そのものを指すだけではなく、その機能までも含めた言葉なのです。

では、藻場の多様性を調べるには、どのようにしたら良いでしょうか?…本邦沿岸の藻場を見ると、それを構成する底生の植物だけでも非常に多様で、それらを調べるだけでも手一杯です。そのため、先述の調査では、主に、藻場の主要構成種である海藻や海草の種類の調査を行っています。“論より証拠!”…この調査の証拠標本として、海藻や海草の標本が収蔵されているのです。

“一体、どのようなものが収蔵されているのか?”

そもそも、沿岸の底生植物～海藻や海草～という何を想像されるのでしょうか? 前者は、かいそうと読み、維管束を持たないコンブやワカメ、ノリなどを指します。後者は、うみくさと読み、陸上植物と同じく維管束を持ち種子で増えるアマモやウミヒルモなどです。いずれも、植物であり、海のごく浅いところで、光をエネルギーに換えて生きています。そんな海藻や海草たちは、色、形、大きさといい、実は、おそろしく多様な仲間なのです。

海藻類は、大きく、緑藻、褐藻、紅藻と門の異なる3つの綱に分けられ、日本沿岸で確認されているだけでも、それぞれに、13目24科62属、14目33科102属、15目54科278属が知られ、1500種以上があります。海草類についても、本邦沿岸で3属16種の報告があり、温帯～亜寒帯としては、世界でもオーストラリア沿岸に次ぐ多様性です。

ここまで書いても、どれだけ多様なのか、イメージが付きにくいことでしょう。海藻類に関しては、門の異なる3つの綱があるので、“海藻”というひとくくりの言葉の中に、人とカエル(哺乳類と両生類; どちらも脊椎動物門)どころではなく、人とイカやタコ(脊椎動物門と軟体動物門)、人とミミズ(脊椎動物門と環形動物門)というくらい異なるものが含まれているのです。つまり、コンブ(不等毛植物門、褐藻綱)とノリ(紅色植物門、紅藻綱)とアオノリ

(緑色植物門、緑藻綱(アオサ藻綱*))は、人とイカやタコとミミズぐらい、てんでばらばらな仲間なのです。また、海草類は、陸上植物として進化した仲間がその生育の場を海に戻したもので、海藻類とは大きく異なります。

わが国の藻場は、このように多様な沿岸の底生植物たちがひしめき合うようにして生育している“場”なのです。そんな多様な海の底生植物たちによる多様な藻場を全て見て歩くのは難しいことです。しかし、多様性センターに収蔵された、海藻や海草の標本を通じて、日本の藻場の多様性を垣間見ることができます。

収蔵庫に、押し込められた海藻や海草の標本は、日本の藻場の多様性を示す証拠でもあるのです。

“どのようにして、収蔵されているのか?”

沿岸の底生植物は、多様なだけでなく非常に生長が速いことでも知られています。海の中では重力に抵抗する必要がなく、頑丈な枝や幹を作る必要がない分、素早く体を大きくできるのです。食卓で身近なコンブとて、20m近くにもなります。産地にも因りますが、ワカメは数ヶ月で裕に人の背丈を超えることもあります。12月から3月ぐらいにかけての数ヶ月で、20m近くにもなるアカモクという種もいます(写真)。6-7mにもなるタチアマモという海草もあります。

多様なだけでなく、ともすれば巨大な海藻や海草を、限られた大きさの収蔵庫に収めるため、標本は、水分を抜き、おしばにし、種類によってはいくつかの台紙に分けるなどして、さく葉標本としています。大きくて多様なものが、収蔵庫に押し込まれているのです。

“なぜ、海の植物～海藻・海草～を収蔵するのか?”

沿岸の底生植物たちは、その生きる環境によって大きく形態が変異し、分類学的にも未だ胎動しています。つい最近、綱のレベルで分類体系を変える報告*があったぐらいです。こうした状況下では、藻場の多様性を押さえるべく海藻や海草の種類を調べても、後に困ったことになるかも知れません。こうした事態にも対応すべく調査標本として、海藻や海草の標本の収蔵を進めています。まさに、“論より証拠”です。

食卓に上がる魚介類、お味噌汁のワカメ、だし汁のコンブ、お寿司の海苔などからも、収蔵庫にある海藻や海草、日本の“藻場”の多様性に思いをはせていただければ幸いです。

参考文献 日本産海藻目録(2005年改訂版) 吉田ら



アカモクと背比べ



アカモク

生物多様性センターガイド ・・第2回・・ 標本収蔵施設

「標本収蔵施設」とは、文字通り「標本収蔵に必要な専有の空間、設備等」を指し、一般に、収蔵庫、一時保管庫、燻蒸室、空気調節設備等で構成されています。

では、標本とは何でしょうか。標本は、自然史、歴史民俗等、様々な分野からもたらされます。また、自然史標本も、動植物、化石、岩石、鉱物と多岐にわたっています。

環境省生物多様性センターでは、このうち動物と植物に関する標本（以下「生物標本」）について、後世に伝えることを主目的として収蔵施設を維持運営しています。

“何故生物標本を環境省が保管するのか？”

まずは生物標本の役割を簡単に説明しましょう。これには大きく二つあると考えています。一つは調査研究、もう一つは普及啓発です。

「調査研究」としては、生物標本そのものが「生き物たちの証し」（記録）であり、調査・研究の成果の保証（証拠）であり、将来にわたって研究材料となる情報（情報遺産）であるといった意義が上げられます。

構造や形態の精妙さ、微妙な色彩、肌触り等々、実物でしか味わえないことは沢山あります。本物の生物標本を普及啓発に使う目的は正にこれです。もちろん、目的・内容に応じて、必要となる場面で標本を使うことが基本であり、例えば調査研究や展示のためでも、生物種や個体群に悪影響を及ぼさないよう、必要不可欠な採取に留めています。

生物標本は各地の博物館や大学等に収蔵されています。その中で、環境省が生物標本を収蔵する理由は何でしょうか。一つは、環境省が実施する調査の記録・証拠として責任を持つためです。緑の国勢調査（自然環境保全基礎調査）、国立公園等の保護区での調査、自然再生事業の事前調査等で必要不可欠な生物の採取等を行っています。これら採取個体の情報整備に加え、適切な保管施設を用意することが重要です。また、特に国が保護に取り組んでいる希少動植物種等は、後世への遺産として受け継いで行かなければなりません。例えば、最後の野生のトキ5羽のうち、キイロと名づけられた個体の剥製と骨格がこれに当たります。さらに、我が国の「生物の多様性」を具現する、外来生物への理解を深める等、普及啓発を主目的とした生物標本の確保も必要になります。

“生物標本を収蔵するには？”

標本の大敵である標本害虫、カビ、紫外線を上手に制御すれば、良い状態で百年は優に保存できます。そのためには、害虫が侵入しにくい構造を持つ空間、カビの発生しにくい温度湿度の維持、太陽光等の遮断が必須です。標本収蔵施設は、これらの条件を兼ね備え、標本を長期間にわたり管理するための専用空間として整備されるものです。

“生物多様性センターの収蔵施設は？”

生物多様性センターには、約5400の収蔵庫（内部に標本棚設置）と、標本燻蒸室、作業室、空気調節設備等の管理ヤードがあります。収蔵庫は6つの空間に区切られ、うち3つを乾燥系生物標本、2つを液浸系生物標本に割り当てています。残りの一つが特別収蔵庫で、シマフクロウ、イリオモテヤマネコ、ジュゴン、アオウミガメ等の剥製・骨格標本を収蔵しています。現在、約6万点を数え、そのうち8割が昆虫標本、残りは、維管束植物及び海藻・海草の錯葉標本（押し葉標本）、哺乳類・鳥類・爬虫類の剥製・骨格標本になります。これらの標本は、環境省が実施した調査、事故等で死亡した個体、既存の標本を収集したものです。

標本事業の内容（収集・管理・利用）については、過去のニュースレター（14、16、17号）をご参照下さい。

多数の人の出入りは標本へのリスクを増やす危険性を高めてしまうため、出来る限り収蔵施設への出入りを少なくすることを基本にしています。とはいえ、生物多様性への理解を深める優れた機会でもあることから、年1回、生物多様性まつりの日に限り、希望者の方に収蔵庫見学をガイド付きで行っています。今年は8月6日（日）で、見学には事前予約の必要はありませんので、お気軽にお立ち寄りください。

最後に、収蔵施設に入らなくても生物標本が見られるように、5月下旬から展示室前のロビーに一部の生物標本を配備しました。現在、ミニ企画の内容に合わせて「コウモリ」に関わる生き物たちを展示棚に設置しており、順次入れ替えをしますので、こちらも是非お楽しみください。



特別収蔵庫



標本仕器

多様性まつり生物2006 ～夏休みいきもの探検隊～ の開催について

「生物多様性まつり」は、毎年8月の第1日曜日に行っている恒例のイベントで、今年で7回目を迎え、毎年ご家族連れを中心に、沢山の方に参加いただいています。このイベントでは、身近な生き物を通じて生物多様性への理解を深めるきっかけにしてもらうことを目的に、体験プログラムや標本展示、クイズラリーなど子どもから大人まで楽しんでいただけるように、盛りだくさんのプログラムを予定しています。

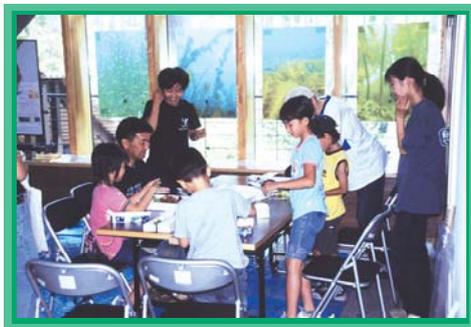
今年もひとりでも多くの方に、楽しみながら生き物の多様な世界について新しい発見をしていただけるよう、スタッフ一同、笑顔と元気でお待ちしておりますので是非、ご来場下さい。

【開催内容】

- 日時：8月6日(日) 9:00～17:00
- 場所：生物多様性センター
- 対象：どなたでも参加いただけます
- 参加費：無料(一部保険料がかかるプログラムがあります)
- 主な内容：
 - ・昆虫や植物標本づくり体験
 - ・森のなかを散策しながら生き物ウォッチング
 - ・海藻でつくるしおり作り体験
 - ・収蔵庫ツアー
 - ・標本展示
 - ・コウモリ関係の展示
 - ・クイズラリー
 - ・生物多様性カード探し・第2弾

一部のプログラムは、定員に限りがありますので、事前にお申込が必要です。
※詳しい内容につきましては、生物多様性センターホームページをご覧ください。

“去年の多様性まつり”



海藻しおりづくりの様子

センターの出来事 (2006年4月～6月)

- 4/25 植生調査成果品報告会
- 4/29
 - | 昆虫WEEK
- 5/7
- 5/30 JICA湿地研修
- 6/2 全国巨樹巨木林の会理事会(東京)
- 6/8 植生調査入札
- 6/11
 - | ホタルサミットinまにわ(岡山)
- 6/12
- 6/13 標本・図書資料管理業務入札
- 7/4 植生調査入札

図書資料室

7月15日(土)から土日祝日も図書資料閲覧室も開館をすることになりました(休日開館期間中(4月29日～10月29日)のみ)。自然環境関係等の書籍を閲覧することができます。是非、お立ち寄り下さい。

展示室



“くつろぎスペース”

展示ロビーに「くつろぎスペース」を設けました。展示を見た後に、靴を脱いでのんびり絵本を眺めたりすることができる空間です。小さな場ですが、どうぞ、おくつろぎ下さい。

CO2削減・ご協力のお願い

生物多様性センターでは、地球温暖化の原因になる温室効果ガスCO2(二酸化炭素)を減らすために、以下の時間は展示室内の照明を消しています。

5月～10月の平日
9:00～11:00, 16:00～17:00

展示室をご利用されたい方は窓口にお申し付けください。点灯いたします。

コマちゃん
「環境の心」ホームページより転載

案内図



発行：環境省自然環境局生物多様性センター

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田剣丸尾5597-1
 電話：0555-72-6031 FAX：0555-72-6032
 URL：<http://www.biodic.go.jp/>
 e-mail：newsman@biodic.go.jp

※ニュースレターは下記URLからもご覧頂けます。
 URL：<http://www.biodic.go.jp/center/news/>